

きの進歩と云ふ可く同校日本畫科の本年に於ける特長と云ふ可し

次で花鳥山水は尙幾多の習練を要す 日本畫成績の觀覽を終り彫刻室に導かる 坪數約四十 入口右方大姿見に添ふ一脚のテールあり主任教授の席とす 茲に有髯肥滿せる一見溫厚年輩五十二三の教授裕にシガレットをふかし憩ふ 別人ならぬ高村光雲氏なり 教室の中央に花を手にせる少女と年頃十八九とも見ゆる裸躰の美人あり 共に高サ四尺 同氏の説明に依れば兩者共塑造卒業製作にして尙ほ二個は仕上中なりと 尙ほ北面して左手書籍を持し右手を胸邊に翳して直立するは種痘の成功者ゼンナー氏銅像の原型にして材は檜を用ひサビ漆を加へしもの 大さ實物以上にして原型を除き製作日數四ヶ月を要せし由 氏は我國彫刻の盛衰には説明甚だ親切なり かゝる教授に教を受くる學生こそ幸福も亦大なる可し 高村氏の教室を辭して黒岩君の擔任せる新入生十六名の原型講習作業を一見致し候へども追々に御報可仕候(北垣靜處氏書信の一節 文〔文芽の略カ〕)

(明治三十六年六月二日『京都日出新聞』)

⑦ 図画教授法講習会および木炭画・鉛筆画講習会・図画教育会

明治三十五年発足の図画取調委員会の活動に付随して、同三十六年の夏には本校に於て文部省図画教授法講習会が三週間に亘つて開催され、これと併せて本校主催の木炭画、鉛筆画講習会が開かれて、全国の中等学校から多数の教員が参集した(本書218頁記事参照)。ここに図画教育研究の氣運が高まり、右講習会終了後、出席者たちによつて図画教育会が結成された。

図画教育会の会長には正木直彦が就任し、白浜徹が幹事となり、事務所は本校内に置かれた。『図画教育』(明治三十六年十二月創刊)



『図画教育』第1号

はその機関誌である。同会の会員はじめは三百名ほどであったが、のちに六百名の多きに達し、各地に支部が置かれた。学校単位の入会もあった。後出「明治四十四年再調会員宿所録」によれば会員総數五七六名、うち東京美術学校卒業生が二七・六%を占めている。木元平太郎、岡田秀、鶴川俊三郎、柿山蕃雄らは委員として会の運営につとめた。同会の事業の中心は教科書編纂で、明治三十七年には中学図画教科書(十二冊)、高等女学校図画教科書(五冊)、図学教科書(四冊)を、同四十一年には中学図画教科書および高等女学校図画教科書の改訂版を編集し、鐘美堂、北村書店、明治図書等から発行。売れ行き良く、その収益を以て会の活動が続けたが、教科書編纂をめぐつて内部に対立が生じたことなどにより、大正四年に解散した。

同会は本校と非常に密接な関係があったため、東京芸術大学美術学部には同会に関する左記文書が残っている。

明治三十七年以降編纂関係書類	同	同
明治四十四年ヨリ庶務書類	同	同
支部書類	同	同
明治四十四年四月再調会員宿所録	同	同

なお、同会については外に次のような参考資料ないし研究書がある。

- 『図画教育』第一号〜第二十一号（明治三十六年〜同四十五年）東京芸術大学附属図書館蔵（第八号、第十八号欠）
- 『随想録』岩田僊太郎著（昭和六年）
- 「続・日本の近代美術教育史」三〜六。金子一夫著。『美育文化』第二十七卷第八号〜十一号（昭和五十二年。美育文化協会編集部）

⑧ 日光修学旅行

本年十月の日光修学旅行（222頁参照）は愉快的旅行であつたらしい。『東京美術学校校友会月報』第二卷第二号の「日光はがきだより」に寄せられた各科学徒の感想にもそれがよく現れているが、正木直彦も次のような風流なエピソードを伝えている。

明治三十六年の事であつたと思ふ。美術學校で日光へ修學旅行

をした事がある。此の時、日本畫の方では川端玉章、荒木寛敏と云つた老大家の外に、寺崎廣業が付いて行つた。

さて、湯元の宿に泊つて、晩飯に一杯飲むと廣業は急に元氣が出て來た。見るとその家の唐紙が張替へばかりで、上の小壁までずーつと白くなつてゐる。それを見てゐる中、勃然として畫心起り、

『一つ、やらうか！』

と云つて、學生に墨を磨らせると、廣い唐紙から小壁に續けて、それへ廣業が一氣に大きな山水を描いてしまつた。すると寛敏さんが秋の事だつたので紅葉を描き、玉章が水を描く——と云つた工合で見る間に偉いものが出來てしまつた。

ところが、それを見て吃驚したのは宿の女中で、周章で主人に注進した。主人も驚いて其場に現れ、

『折角張つたばかりの唐紙を、こんなに汚されてしまつて……困つたことになつた……』

と澁面つくつて苦情を云つた。それを見て廣業は、空呆けて、『いや、それは氣の毒な事をした。では、もう一度張替へさせて上げよう。……』

と云つて笑つてゐた。其時、宿の主人を廊下に連れ出して何か耳打をした者があつた。すると、間もなく、主人が最前とは打つて變つて、袴まで穿いて現れ、座に現れて平謝りにあやまつたが、今度は番頭に、續々張りたての唐紙を運ばせて來て、『どうぞ、此處にも未だ張替へたばかりのがござりますから、よろしかつたら何なりとお描き下さるやう願ひ上げます。』